



「危機管理」は日頃の準備から

伊丹市立総合教育センター
所長 太田 洋子

今年、大阪・北海道での地震、未曾有の台風の到来と大きな災害に見舞われた1年でした。学校では警報による休校だけに留まらず、停電等により休校せざるを得ない状況になるなど、これまで経験したことがない事案に対応しなければならないことが多くなりました。各学校の教育課程の編成は校長が責任を負うことになっています。そういう意味で管理職というのは、様々な情報を収集し、それらをもとに多角的な視野で最終的な判断を下す人なのだと思います。ただ、相次ぐ災害やその後の学校の再開等については、判断が難しい局面もあります。その時に慌てるのではなく、日頃からのシミュレーション等により、自身の危機意識を磨いておかなければなりません。学校における危機は、災害だけではなく、いじめや問題行動の多発など、生徒指導上の危機に日々直面しています。このときに、慌てないためにはどうすればいいのでしょうか。



第1は学校の教職員全体で「危機意識」を高めることです。

「危機管理やカリキュラムマネジメントは管理職の仕事である」と先生方が思っている学校は危ういのではないのでしょうか。自分の学校で起きたことだけでなく、他校で起こったことも、「起こりうることと（想定内）」として捉え、「学校における危機」について教員全員で情報共有しておく必要があります。児童生徒からの訴えに対して、「これは生徒間トラブルだから」と見過ごしてしまうと、後でいじめにつながり、重大な事態になることも想定されます。子どもたちの声にしっかり耳を傾け、「いじめではないか」と認知して対応していくことが大事でしょう。今の時代、いじめの見逃しが許されるはずもありません。

次に、学校としての「チーム対応」は不可欠です。学校には「いじめ防止基本方針」の策定が義務づけられ、ホームページで公開されています。しかし、それがお題目だけになっていないのでしょうか。管理職・担当者を中心に、最新の情報を周知し、危機が起こった際には、設置されている「対策委員会」を活用し、方針を明確にした対応をすべきです。基本方針は知識ではなく、意識のレベルまで上げておきたいものです。

最後に、危機においては初期対応がキーポイントになります。「最初に対応していれば説明、対応が遅れて後になると言い訳になる」とよく言われます。自分の主催する研修に来ていた若い先生の学級でのトラブルの話を聴き、「教育は今日行くや。ここにおらんと早く家庭訪問しておいで」。…私が尊敬する故野口克海先生がいつも言われていたお話です。「これくらいなら大丈夫」「〇〇で急がしいから明日にしよう」そんなちょっとした判断の遅れが危機に繋がります。頭ではなく足を運んでこそ解決する問題は多いのです。一年の締めくくりに今一度、学校に関わる人すべてが、自校の危機管理体制を見直しておくことが必要ではないのでしょうか。

いいじめを生まない環境づくり

クラス

学校行事が一段落し、2学期のしめくくりの今こそ子どもたちが安心して学ぶことができるか改めて、たくさんの目で確認しましょう。

教職員間の連携

- 子どもを一人ではなく、**多くの目で見守る職員集団**をつくる
- 普段から子どもの様子を学年会等を通して**共通理解**をはかる
- 問題が起これば、**一人でかかえこまず**管理職、学年・生徒指導担当教員等に**報告・連絡・相談**をする

教師がわかりやすい授業を行う

- 学習指導要領**をふまえ、子どもにどんな力がつけばよいか、何ができるようになるばよいか**めあて**として明示され、**それに対するふりかえり**がある授業づくりをする
- 全ての子どもたちが理解できる**授業のユニバーサルデザイン化**を進める
- ICT機器等**を効果的に使い、より一層理解が深まるようにする

いじめアンケート・Q-U等の活用

- 定期的なアンケート調査や、ソーシャルスキル（対人関係能力）の測定を活用し、育成のための**がかりや、いじめの未然防止、早期発見**等に役立てる
- アンケートや、Q-U等の結果を効果的に活用するために、学年会や校内研修会等で**情報共有**する
- 年に数回実施して前回の結果と比較することで、**クラスの状況**を確かめる
- 「計画（実態把握）→遂行→評価」のサイクルを何度も繰り返すことで、**定期的に集団の状態**をチェックし、悪い部分の**早期発見**に努めながら、それに見合った**対応**を行っていく

子どもたちが主体的に活動する学級づくりをする

- 子どもたちの興味・関心や能力に合った**活躍の場**を用意して、一人一人に**存在感**を持たせる
- 学級活動の時間等を使って学級の諸問題を発見させ、**自分たちで解決する機会**を与える
- 子どもたちが、自主的に運営する学級の取組を通して、**満足感・自己肯定感**を持たせる

家庭との連携

- 子どもたちの様子や交友関係等について、**常に情報交換**ができる**雰囲気**をつくる
- 子どもたちに変わった兆候があれば、すぐに保護者に連絡する等、**きめ細かな対応**を心がける

地域との連携

- 地域の人々と地域行事等への参加を通して、**良好な関係**を築いておく
- 地域の人たちからの**情報を大切**にするとともに、**すみやかに対応**する
- 日頃から「**開かれた学校づくり**」を心がける

関係機関との連携

- 日頃から**積極的に情報交換**を行ったり、**指導・助言**を得たりして**協力関係**を築く

すべての子どもたちが**安心**できるクラスづくりを!!

第2回 新規採用教員等訪問指導より

第2回訪問指導を10月～11月にかけて実施しました。授業をされた新規採用の先生方、お疲れ様でした。さらなる指導力及び実践力の向上をめざし、授業力向上（カリキュラム）支援センターコンサルタントからのメッセージを参考に**授業力の向上を図りましょう。**

山田コンサルタントより

それぞれの課題に向かって真剣に取り組んでこられた若い先生方が、さらに切磋琢磨し、専門職として、技を磨き『匠』となられることを期待します。

1. 一問一答（教師が発問、一人の優秀な子どもの答え）の繰り返しで終わらず、**子どもたちが自ら考えを深め、学級全体で学び合う授業**をめざしませんか？

教師が発問し、子どもが答えた後、

- ① 子どもの答えを教師が繰り返すのではなく、ねらいに沿って評価する。
- ② 子どもが一人答えたら、次々5～6人に発表させる。（自分の言葉で、授業に主体的に参加）
- ③ 子どもが答えた後、「同じ考えの人」と挙手させ、5～6人発表させる。
- ④ 子どもが答えている時、教師は、発表者の顔が見え、多くの子どもたちも発表者の顔が見える所に立つ。（教室のかど等を活用）

2. 目的意識を持って教科書を1時間内に何度も読ませることで、**言葉理解を深め、自ら内容を読み深める力**を育てませんか？

特に国語の授業では

- ① 単元のはじめ等 範読、一斉読み、銘々読み、段落ごとの読み、黙読
- ② 読み深める時等 一人で読み取る、ペアで読み聴きあう、会話を読み合う

後藤コンサルタントより

2学期の学校訪問を終え、先生方が子どもたちとの信頼関係を深め、自信と落ち着きをもって授業に臨んでいる姿が見られました。さらに授業力向上を目指してください。

1. 苦手なものにチャレンジしましょう。

2回目の訪問で、「手紙」「ごんぎつね」「三年とうげ」「すがたをかえる大豆」「アップとルーズで伝える」「お話のさくしゃになろう」等、初任者が少し苦手とする物語や説明文、作文にチャレンジする先生が多数いました。また、道徳や社会科にチャレンジする先生もいました。苦手なものや難しいものを教材研究し、授業公開することは、大変ですが得るもの（教材研究の視点理解や授業の進め方等）が大きく、想像以上に授業力がつくものです。**3年目までに苦手のものにチャレンジし、授業公開しましょう。**

2. ペアや班活動の仕方を児童・生徒に教えましょう。

どの授業もペアや班での活動がありましたが、残念ながら話を聞かない子、話さない子、一方的に話す子等、活動がしっかりとできている学級は少なかったです。まず、**話し合うルールをしっかりと作りましょう。**ある学校では、ペア活動の『アイウエオ』というルールがありました。アは相手を見て、イはいい姿勢で、ウはうなずいて、エは笑顔で、オはおしまいで聞くというルールです。また、ペア活動では「右側の人から話しましょう」と順番を指定するのも有効です。学級で独自のルールを考えてみてはどうでしょうか。

発行 伊丹市立総合教育センター

月～金 9:00～21:00 所在地 〒664-0898 伊丹市千僧1丁目1番 TEL 072-780-2480 FAX 072-780-2482
土 9:00～17:00

休館日 日曜・祝日、年末・年始 総合教育センターHP <http://www.itami.ed.jp/>